

## 古本屋の仕事場

橋口 俣之介（誠心堂書肆）

### 店の裏にコックピット

わたしの仕事場は店の裏側にあつて、机上にパソコン、周囲の棚に参考文献がひととおり揃った二畳分のスペースである。二人がかりうじて仕事ができる程度の広さなのだが、なかなか居心地がいいので、いつもそこに籠もっている。

ここをコックピットと呼んでいる。航空機の操縦席には無数の計器とスイッチが並んでいるが、パイロットは腰掛けたまま、これらを自在に操ることができるようになっている。わたしの仕事場も狭いが何でも揃っているの、ここで操縦士と副操縦士が本の調べものや値段付けが十分にできるというわけなのだ。

茶の湯でも、座ったまますべての用がたせるように、手の届く周りに必要なものをすべて整えておく。それと同じなのだが、本とパソコンに囲まれた一角を茶室というには、あまりに風情がないので、その精神だけをいただいている。ただ、あまりの便利さに運動不足になってしまう

ことは気をつけないと。

これで十分に用がたせるのは、国文学研究資料館が公開しているインターネットの「日本古典籍総合目録」が充実したからである。京都大学の「漢籍データベース」や図書館の「Webcat Plus」も使えるので、重い目録類を広げなくてもすむようになった。おかげで全九巻の『国書総目録』は、倉庫行きとなった。本屋が本を使わないとはと、お叱りを受けそうだが、あくまでも手段の問題なので合理的に考えている。これからの時代は、生き残っていく本と淘汰されていく本が出てしまうことは避けられないだろう。汎用的で重たい目録類は、残念ながら消えてく運命にある。

しかし、便利にはなったが、インターネット上には信用のおけない情報が多い。使いものになる情報と、そうでないものとは峻別しなければならぬ。そういう点で、わたしの仕事場から本が消えていくことはない。信用がおけるかどうかは、書物の側に軍配があがるからだ。

その参考文献が手元に揃っているからといって、コックピットに大きな書庫は必要ない。書齋というほどの場所ももっていない。自分にあつた必要最小限の文献だけを手元に置いておく。せいぜい一般の家庭に置くような本棚ひとつ分程度のスペースである。

そのかわり厳選している。いつかは必要になるかもしれないと思って手に入れた文献であっても、一年経つて一度も開かなかつた本は置き場所をかえる。店の近所に借りている事務所兼倉庫の一角に、第二参考文献



献置き場があつて、そこへ持っていく。その倉庫行きとなつた本が必要な時は三分歩いて見に行けばよい。仕事場にはほんとうに使える本だけを選んでいなのだ。

それで間に合わないときは、まず自分の店内の本を見る。売りものだが、役にたつ記述を見つけることがある。「こういうときに使う本だつたのだ」

と、自分の商品ながら感心したりする。それで足りないとときは、神田をひとまわりする。小一時間散歩がてらに歩けば、必要な本はまず古

書街のどこかで探すことができる。神田はなんといっても大きな開架式の図書館である。じつに便利な場所にいるのだとつくづく思う。

古本屋は自分の仕事場として書齋をもつことを一度は夢見る。しかし、たいていは挫折する。せつかくそのスペースを確保しても、じきに商品の本に占領され、自分の居場所などはどんどん削られていってしまうからだ。

かつて友人の古書店が念願の店舗改築をはたし、そこに仕事場として大きな机を入れたことを自慢していた。マホガニー製のりっぱな書齋机で、わたしもしきりにうらやましがったものだった。ところが、二、三年して立ち寄ると、見事に机は本に埋もれていた。仕事をするスペースなどどこにもない。これではマホガニーでなくベニヤ板で十分だ。「いっそ、机を捨てれば、もつと本が置けるぞ」とひやかしたものだ。

同じことは先輩の店でもあつた。広い作業スペースが最初があつた。

「重宝していますか」とたずねたところ、

「あそこは、本がいっぱいでね。仕事は自宅の部屋のこたつでしているよ」ということだった。

書齋が本で埋まり、家族からひんしゅく響聲をかつている蔵書家も多いことだろう。本というのは、ふえることはあつても減ることはないのだ。本屋は、多い仕入れがあればすぐに店内が満杯になる。とりあえず臨時の置き場所として、奥の仕事場を借りることになる。少しずつ片づくが、また仕入れがある。前の本の上に置かれる。この繰り返しで、本が増えること

はあつても、元のスペースに戻るまで減らすことは、けつきよく金輪際できっこないのだ。ついに店主の居場所などはF1のコックピット並みになって、もぐりこむように入らないと座れないようになる。座るといふより、はまりこむといったほうがいくらいだ。それでも本に囲まれているのは悪くないもので、そんなところが本屋冥利なのだ。

## 水曜日の楽しみ

和本専門の市である東京古典会は、毎週火曜日に開かれる。そこで買った品物は、翌日の朝一番に運送されてくる。その水曜日の楽しみは、前日買った本の整理と調査だ。さっそく荷ほどきをする。

古本屋になって、なにがよかったかといわれれば、わたしはこの仕入れたばかりの本を整理することだと答える。至福のときなのである。市の会場でしっかり現物を見て入札してきたつもりなのだが、短時間に隅から隅まで見られたわけではない。まして山になっていた品は、全部確認したわけではない。幾分、勘をはたらかせて「えいや！」と買ってきただけのものもある。だから、じっくり見るのは落札品が店に届いてからだ。それを開いて、あつちの本をひっぱりだし、こつちの文献をくくる。それに没頭する。

思いがけずうれしいこともおきる。中に珍しい本をみつけることもあるのだ。なにげなく開いたらある著名な人の蔵書印が押してあった、並みの本のつもりが思いのほか刷りがよく初刷本かもしれない、おもしろい挿絵が入っていた、などわくわくしてくる。

逆に「なんだ、こんな本か」とがっかりすることもある。つまらない本に高い値段を入れてしまって「何年古本屋をやっているんだ」と自分を責めなくなる時もある。待望の本がようやく買ったのに中に大きな虫食いの穴があいてしまっているときは、虫を逆恨みむかしたくなる。

書名と著者名や分類くらいはインターネットですぐに調べはつくから、一定の図書データをとることは誰にでもできる。しかし、それでは、まだ不十分、仕事は半分にもみたくない。わたしたちには、それに値段をつけるという大仕事が残っている。

値段は、その本の意義だとか、伝存の多少、刷りや版の前後、書き入れや旧蔵者のこと、どんな方がこの本を買い求めるだろうか、などを勘案して総合的に決める。もちろん、失敗もたくさん経験してきた。自信をもってつけた値段では受け入れてもらえないこともあるし、その逆もある。どう考えても仕入れ値より高くつけるわけにはいかない本もある。わたしの無知やうっかりを思い知らされることがたびたびなのだ。それでも、こうして古本屋になって三十数年、何とか食えてきたのだから、まあ、合格点といったところである。

## 落丁くくり

高価な本はこのとき落丁らくちようがないか調べる。これは洋装本でも同じだ。わたしの店員時代は、店番ばかりですることもないので、一所懸命この落丁くくりをしたものだ。本を十頁単位で、和本は五丁ずつめくっていき、抜けている個所がないか調べるのである。

江戸時代の史料にも、小僧のする仕事は、落丁くりと出てくる。現代でも使う落丁といういい方は古くからの用語だったのだ。

落丁というのは製本の段階でおきるミスなので、ほとんどの洋装本は十六頁分一折がそっくり抜けてしまう。めくっていくうちに十で割り切れない頁数なるので、そこで落丁が発見されるわけだ。新刊が出版社にあるうちは交換してもらえるが、絶版になったような古い本は交換ができない。そこで、市場では落丁本は返品できるルールができています。

和本の版本は一丁単位で抜けてしまうことになる。番号をつけていくのを丁付ちようつけといい、それを順に揃えていくのを丁合ちようあといい、順が狂ったときを乱丁というのも現代の業界用語と同じで、和本時代からの用語だ。丁付は一、二、三と番号をふるのがふつうだが、二があつてさらに「又二」という書きかたのときがある。二をふたつ作ってしまったか、あとから一丁追刻したときの書きかただ。「二ノ四」などとあるときは、二、三、四丁をまとめて一丁にしたときである。

江戸期の本屋の日記などを読むと、当時から落丁本には気をつけていて、律儀に顧客に対応している。ただし、草紙屋の本はいい加減なものもあつて、丁付けが目茶苦茶な本がある。そのどれであれ、それが歴史的遺物というもの。二百年、三百年前のミスを現代のわれわれが責任をとることはないと思うのだが、返品だ値引きだと面倒なことが多いのには、釈然としない。

長澤規矩也先生がまだご存命だった頃、和本の落丁が見つかったと、たと

えば、全五十丁の本の一丁がないと、買った値段の五十分の一を値引きするようにおっしゃった。一万円なら二百円お返しする。きわめて合理的だった。誠心堂の先代は「さすがに数学者の息子さんだけある」と感心していた。

先生は、長身ですらりとしていて、いつも着物姿で神田を歩いておられた。齒に衣を着せないとはこのことかというほど舌鋒鋭いが、古本屋にはやさしく、わたしの先代のこととはとくに気にいっていたように「よおつ。元気か」と風呂敷包みを小脇にかかえて威勢よく店に入つてこられた。

本職以外に当時の国鉄のご意見番でもあり『国鉄を叱る』（昭和三十五年、法政大学出版会）という著書まであった。鉄道員とのやりとりの話でひとしきり談笑したあと、本のことをあれこれお話しされていく。まだ古本屋に入りたてのわたしは、そばですつと聞いていたが、それが大変勉強になったものだ。

古本屋は門前の小僧習わぬ経を読むようなもので耳学問だから、こうしているいろんな先生方から教えていただくことが身についていく。まだわたしは二十代で、長澤先生はもう晩年だった。もつとお会いしたかったが、じきに身罷ってしまったのは残念このうえない。ただ、その後も先生の著書を通して勉強をさせていただいた。その意味で、わたしの師匠はこの長澤規矩也先生と先代・田中十蔵である。